



鳳巾の晴

狸廻之部

六



長門

萩 武門連

亡父中阿と萩城子松子門の冥途にて  
昔の勢と所下の志を以てあつたる一の節は  
初子の折くは其とそめ志を以てしはし  
中きちかく光陰を送りし中と世帯り  
なんまよりいふ事と所下一及の由縁を  
そよりまき物所下二所より御とま  
やりし世帯りし中の一よるはし  
かせ一甲はるし世帯りし中の一よるはし  
能はるし深泊しよるし中の一よるはし  
ふき行くと月より日と信しはるし





去年のまきちを録と訪り一因に乃  
こけしその中遊ありしやうてみ月  
初めこれ長陽ありを秋にをり  
先とて古社園に去途のまを短く  
しおろしそのまを短くしおろし  
ゆきゆきのまを短くし

名をさかしくしをさかしくして

萩のいどのついで時をさししやうて

何うれとおよし晴に夕月 里川

片膚まはしはるるの綿よて 五全

あゝゆねをわたり布れぬは 藤柏

橋のゆるりし跡く風のつらり 尾洞

悟れよふをり判てしをさかしくが 丹月

せほくまをこ仲居り教れしを 自發

まを短くしはるるのまを短くし 清柳

能くまを短くしをさかしくし なむ

舟まを短くし馬ぬはるる 三枝

まを短くしをさかしくしをさかしくし 陌亭

鶯はまを短くしをさかしくし 藤本

二  
奈の言や姫君に初めおけりて  
里事

あんなり子かふるさへ病瘥  
危言

しこのうら新田村の老の心  
交川

中心よりをのりて拂いお  
伍住

そらうら女房に謎の壺を  
里水

既中と云ふは流るる水  
洗水

虚と云のるは月の方の  
不尺

又その用の新し  
里正

そらうらと云ふは  
幹枝

はつと云ふは  
一任

さうらと云ふは  
里曉

そらうらと云ふは  
手

秋の勝地よ古は房とす  
の故を看りてそのむら  
正風の因をいひて  
まはるる言を  
とては  
まはるる言を



あまのこゝろに 一はちらゝ時 づふ

名源

ふくのまひらば なへ 海の音 中阿

せり 古はる こと 竊案記 舞 中阿 琴阿

火と 竊案記 月と 中阿 土と 中阿 土と

い 中阿 の 中阿 ぼ 中阿 浦 中阿 の 中阿 改 中阿 き 中阿 り 中阿 ひ

病 中阿 の 中阿 岸 中阿 と 中阿 終 中阿 こと 中阿 り 中阿 そ 中阿 り 中阿 中 中阿 の 中阿 ね 中阿

し 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

健 中阿 の 中阿 心 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

初 中阿 層 中阿 と 中阿 一 中阿 あ 中阿 れ 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

意 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

多 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

多 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

早 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

山 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿 の 中阿 ち 中阿

夢〜〜又〜〜なる丁 一徑

ほろ〜〜見よおしち〜松一本 幹陸

あ〜の〜やあ〜夕暮〜風〜限 沈水

紅〜あ〜人〜〜〜〜 伍任

暮〜げ〜やま〜ひ〜と〜脚〜の〜丸 丸橋

ま〜よ〜〜し〜ら〜〜〜〜〜 志天

そ〜ふ〜あ〜招〜よ〜〜〜 枯庵花 支川

ほ〜〜の〜神〜〜〜 澄守〜草花 露友

〜〜〜の〜〜〜の〜も〜帰〜〜 丁集

あ〜音〜し〜耳〜は〜ま〜し〜や〜さ〜の〜林 藤下

〜〜〜の〜や〜〜〜〜の〜お〜け 三枝

あ〜あ〜や〜〜〜〜〜〜 里水

一〜あ〜〜〜の〜悔〜と〜氣〜の〜 支地

あ〜さ〜自〜ら〜や〜あ〜ん〜ふ〜あ〜原〜の〜枝〜折〜す〜 里岡

ぬ〜は〜〜の〜ま〜あ〜ん〜て〜こ〜せ〜〜 臨極

ま〜の〜さ〜ら〜や〜〜〜氣〜は〜〜〜の〜花 花抄



花もよき草もよきやうに散るも 二階

白く白く花もよきやうに掃 里境

と壇へまゝ川あけし花菊は 月夜

林火もよし子もよき花もよき 古歌 海舟

まよゆくせし何まへへ山極 何山

まよあまの身は残る花掃のあ 危言

まよや庭へつりまよつりまよの 古歌 里川

セツ

急ぐまよつりまよ 長門のまよは残るも  
早よゆまよのまよまよ 花のまよはまよ  
力のまよまよまよのまよまよをまよ

つゆまよ 早のまよまよのまよまよ 二階

玉糸

玉糸のまよまよを推のまよまよ 花もよき  
花もよきまよまよのまよまよのまよまよ  
まよまよまよまよまよまよまよまよ  
まよまよまよまよまよまよまよまよ  
まよまよまよまよまよまよまよまよ



おのゝり子鳥の書雲の橋を此  
 塚の禊め、くくー洗滌  
 此のやりのまゝあゝ火くまゝや  
 彼岸此岸よりまゝ鳴り  
 ぬゝん子祇堂の志此の宗  
 さあ、仲居子羽織をき  
 名をき、はと泥してゑんこの  
 仁とーの信田をき  
 李際  
 立故  
 呂焔  
 露亭  
 可得  
 新巴  
 地吉  
 菱和

あうねる夕日の脚此何まを  
 にく川に神の石葛をやり  
 五こはやと禊祇堂に和尙  
 新しく川を仕替禊文  
 おこや子二百十日の月此禊  
 あまも、角力の像自り  
 ちんちんと樹に女房の根はあ  
 毒のあし、何と喰ふ  
 考之  
 其夕  
 古桐  
 素亨  
 如流  
 呂角  
 此中  
 可宥

2011

時ふくゆく美あふふ草と生りあふせ 菊之

初しよほきふるの湯そ 藤素

各源

おのりくし林のまうくや 一ツ庵 怒江

川音のまうく流あふや 巳月雨 東之

白のゆあけていもくしれ流あふ 旁中

夕まや 蓮のあふ流あふ 呂好

鬼灯や 似言あふ乳母の口はよる 露草

言ふらふきんしをきんや石流あふ 素洞

口紅とほしきしなうりも草あふ 新和

あふらふやりまけして流あふの中 李際

こけりもくし流あふれ 一葉あふ 新巴

あふらふらあふきんし近し 一葉あふ 立故

あふらふやん流あふ 一葉あふ 可相

あふらふらあふきんし近し 一葉あふ 尾河

あふらふらあふきんし近し 一葉あふ 藤素

遠松房連



送るるよよ子仲居の露よわれて 浮舟

よふ志やあらわらぬ舟にや 凡車

何遍ふの舟盤をそくちくと 柳里

舟をわくよる舟走をく凡 芝山

鞆ふく比敵へ之里の人離れ 起六

船入り地をよふちとや 古梅

右流

初まきや門よまき舟 舟の中 南之

獲食のまきと 神よりあまの山はる 浮舟

襟垢れおまよふ舟をささけ 凡車

朧きあふ舟も植まぬ危の庵 柳里

舟の中に植まぬとて曇りれ 芝山

よとくりい舟入りしをん子園ふ 可洗

舟もほの舟を起るより春のま 樂枝

舟のまよふほの舟をけく之凡の月 起六

雨晴やお涼のそり舟の声 古梅

上氣とくく夕日の影やほく一原 九渡

お又てふ幸ぬけとくく一原の影 崔秀

布川やその晒人の日子馬の 怡文

態中路の名をすてはく岩さの 凡子

江邊

何し西角子の地帯を家住をわ  
あつてふとありて溪の影さの  
きり上は流と奥一

江邊とくく夕日の影やほく一原 九渡

うまふいおぬく一夢の初丁 西角

出こひりの氣をせもまんこをさす 梨敷

仲人さふよふい人もあはれ 白法

自中さく小坂をく川の近一里 山翁

おぬくお坊のくもくらや 寺

名録

唯清の掃了あつて一溪の影と 西角

唯ぬれをさすく一葉の影 山翁







ろりこきく。まは海りのりりり 完乙

えしとけり 明馬峰く 完乙

名源

まはくくや氣つふいふふいふ 完乙

ふのえしとけり古くきく 完乙

お自らやそれくくえく 完乙

おれくやきくくくく 完乙

おれくくくくくくく 完乙

桂の平

おれくくくくくくく 完乙

完乙

おの月や桂のひくく 完乙

おの月や桂のひくく 完乙

名源

完乙

おれくくくくくくく 完乙

おれくくくくくくく 完乙



お言ふあまの心 宿の宿りし出ま 何人

多し子とよ乃そ水情いよ 榎亭

あそとま小石や一里のちよ玉桐 権耳

まご一二まんを息のふと 三考

雇きの肴傍飯しをいこ路 系人

やがふ陰鳥へ嘘いつふ訓 青標

おまやそ京の小石よの呉服お 梅步

くら片くやうなこの丸木傍 壺長

かろいほほくもを花の南うあ 竹野

お嫁はくく雛い ぬあきき 双一

まちの歯ふふよのあしとほきり 匠者 亦二

羽織の雛い吉来水と 浦林

おき水と渭水のほい川きき 文松

大根市へよ小荷い出は 中林

起しよ乳のそかきく起嬌い 鹿少

されしおきめら嵐さ川きり 冬吳

月の名をいふをいふ淋いぬくふく

あむき草のむくく

孝行と只あり合の社母をいふ 女 桜川

うまやくと片持の 立 雨井

折くと日ちあふえい志の法 百丈

れい月やと流矢のよ 汀亮

名塚

まの林や山堂いふやあけあり 梨寂

うまや世並よわさすなり 鬼形

女子よとまきくくや花の心 百丈

さあぬの掃拵くく紅きふふ 井持

京のるふと帛端くくむむんい 梨寂

余くと柄杓くく水と菊 三孝

夕貞や勢地をいふ及れ花 以一

夕立の空とまき藤をいふ色とり 行二

管形と蓮月くくくあやあんい 壺長

八年のあまのふりそとけのわら 冬景

二つのわらや萩のよそちと 浦林 お年

多良よ世はねのうらふらん 支那 全

床のふらふらおとよふこそ麻のあ 松川 女

くはとや初春と春てりしの萩 東馬 お年

ふらふらや新ふそふそふとのと 松雨 お年

いつそふらふら安きふはのえん哉 仙梅 全

山吹やふらふら北の春はてし 菊兒 全

梅のあやちと山と水と忘るる心 た梅 全

咲くともはまはなよんる花の心 鹿抄

いとわらわらなとてさうさ 可好

名月や只清なりみしあまき 半花

稚子なくや山と水とふらふら水原 汀亮

押さぬはなをのめくとも花や多新哉 梅舟

こころあるなとてふらふら二夜の月 喜禿

宿りてふらふら母一はなはなれ 素人



やうな心程ありたりて啼く終 信務山田 可子

之日子あけたり又悟氣溝 十本 百子

何れ知しぬ教して肯えの歌ひあり 田原山口 壺外

積もつる月と夢のほろろ 淡田 雲白

ハチの死に程よふ歌を 六 六

候とふもほろろ 六 六

云そり 六 六

やうにお場の目ま 六 六

出 二 子 一 子

孝保の存 子 子

え服を 白 白

茶や 外 外

吹く時 魚 魚

サ 本 本

作 教 教

ろ 六 六

...

...



りいとも遠くを産め安くと  
子

おろしき水はくまの月  
き

鳴けいんく志の都念の時ふく  
介

際の新平山向上一路  
白

こころは山門の月海と志をいふ高知を  
おとんとおとむるは杖と雲むしる  
おろしき水はくまの月  
年月と送りたるのころおとむるは杖と  
おろしき水はくまの月  
おろしき水はくまの月  
おろしき水はくまの月

伊房山曰  
可子

向くやあきくはくまの月

おろしき水はくまの月  
ツ本

祓代くう勢 鶴しつふきありて  
魚坊

八節

蓋田とふい稿積中くまの月  
のくおれ徳きくまの月  
雅のきくまの月  
よせおろしき水はくまの月

八節やいん山とくまの月  
ツ本坊

つ本陣のるはとをきこひありて正凡  
自然のまほ信を

表一とある

之隅

表六

今や月子乃のまほしき有のゆ

不易の色はまじりと松を つよ

動流のまじりやう麻は片々のゆ 標般

おの怪々まゝ退き はか

仲人へ膝と膝と此氣し 林歩

よふ 浮いぬ夕 早

名録

京白のや夢を 日向 無六

まじり 市 杖

濱田

濱田上河一の鬼白子ありてまほの周へありて  
よりその父やかこ條井の信とらけはれお  
るも飲力合別の棧中一合ふてまよありて  
まじり 自然の味ある冷暖自知  
の標標と汎流一竹とて

及て 新

月夜ふくまのこころ

巻四

乳母口をうめよのこころ

芦律

隠れしと見ゆる

文波

けいふよふ

仙壺

ハカリーヤ

乙牛

既痛ま

文際

名源

乙丁

名源

仲ら

乃月

ま

梨香

ま

栗梅

除あ

梨香

る

栗江

延雲

乙智

ま

百扇

ま

芦律

川遠い〜〜〜さかき藤哉 麻中

春のまこと人よんせとや萩の雪 以白

さふらふさふらふと月雨 仙臺

舞 けきと文てれるよきふの月 五丁

夕之や清いね里う〜〜ちやけけ 文波

さ〜〜の吉ふもあ〜ね紙るは 凡登

家うのや世をね〜〜〜〜〜 丁巳

おぼや晴り〜〜〜〜〜 右扇

さ糸のぬ〜〜〜〜〜 孤草

故を火や清〜〜〜〜〜 茅々

柳〜〜〜〜〜 長才

夕之や清〜〜〜〜〜 桑牛

糸の子や後〜〜〜〜〜 茅指

昔より〜〜〜〜〜 女 芦江

さ火やさ〜〜〜〜〜 全 荻波

山草とや〜〜〜〜〜 全 扇涼

争の果れぬとて水は枯れぬ  
 五斗  
 谷月や掃くやちなる海の上  
 瓶十  
 暮入や跡と追く抱上乳母も  
 一瓢  
 へこまる情をくさくも谷の坊  
 兔白  
 翁うねや里の町りとうけて笑く  
 陶子  
 昔や羽さのくふ草を雨日の心  
 文燦  
 一ぬのぬく雨のくく輝きく  
 瓢十

横田

昔はさきさきの道るよあなをのちちを  
 ちねーえ鬼子の行め。里をたぬい  
 け和せのたさうしーしんさうよ乃  
 旅りなうしんさうしーおとさあ  
 らく親切ーしんさう

茶坊

ねちくさうしんさうおの心  
 やさきうしん山向も月  
 子鬼  
 海ちねを悟れぬおのー  
 梨寂  
 廊下清んさうしんさう  
 青里  
 おやけしんさうしんさう  
 瓢十

茶坊

茶坊

口ツの目あり一れちちちち

銀凡

名録

吹ぬ目もくちん屋よ癖の尾志うふ

喜里

卯の花と糸一て散らさるる

銀凡

雪やまをまて又アアア

鶴大

ほし朝の虚室は涼一あのみ

夕兔

まはなりし初雪の音あり一いふ柳花乃  
花雪のりともふ石んちちち核田の里よあね

是より此乃の歌いぬる

田房山代  
八舟

名を好くと折尾らんちあのみ

あんのるそそい月をなま

つ本

衣知しぬるちと口音とひあて

破了

柳中乃のまき一長一

瓶洞

下行ふいあ水の是れよえうそ

洞列

知れぬまき一いあこちの春種

言中

積々清 在伝一ちんちち

冠季

お雨のちかた志のし作の 遠白

名録

ふふし又何んそあまのし妻乃雨 善郊

あふしひさ教よそえさ 魏柿ふ 破了

穀汁や母つゝ鳴をぬおまのし 洞列

もろきやまもろーきりのろまのし 瓶洞

松よあてしあゝ素凡のろまのし 遠白

こやくよん力や出まてゝあぬぬ者 芦中

はてうろくあんのろまなるゝあろく 雨を

編福や味を淋ーに持てぬぬ 冠李

唐く新丸治まのるまを亦ま入 八海

この本は、蓋田やその徑回をよみていふなり  
一、このころの時やうある民院のそとをけ  
ておちあはれりーあまのしあまのしあまのし  
とよまのしあまのしあまのしあまのしあまのし  
とよまのしあまのしあまのしあまのしあまのし  
とよまのしあまのしあまのしあまのしあまのし  
とよまのしあまのしあまのしあまのしあまのし  
とよまのしあまのしあまのしあまのしあまのし  
とよまのしあまのしあまのしあまのしあまのし

佳良のそあしくしき水

あつ後はずしけ先んれまのれ日

魚坊

二十里程をそとを人あつた石川の魚坊  
うてうれすゆて家しんせまをうた  
万菊丸うんうれい舞楽のけ揃とさふ  
せんとやれんこの舞坊まをけうかたれく  
その信をまこと水一國の海くさね  
よるし何れをそねくさゆふと旗の羽を  
五うそりおきしきし信うし海坊の  
そ逢るあらん

あましてゑんし仲氣をさふ一月のま

山坊

さる角

あま月さる角のくしそ業内せしれ  
奇聖の社う流すけくし山い常盤ま  
木ま千とあそあそ石川の流れいれ石の敷  
とめくりてそまね風舞のそまそま旗のま  
の神ま一まねる屋ままわらう

山坊

秋風やお流のあまおまをいそ

和光りし月のまきし舞文

馬仙

去佐う孫しそ良のれ晴まああそ社

鶯南

お織りし小睡のまきし

蛙文



世の中此 嗚りしとよ下ふあり 素石

飛る川とくふふ山谷のき川 楢口

高嶺山連て退く氣と知つてい 赤十

そ川と春の睡 寝ふ下り青 車乙

名解

ちね特し山はくくこ山 楢 爲仙

やまの何妻よ即りてまの峰 陸丈

高嶺てふ山はくくめふ素山子山 素石

やんね月よぬとあまに楢の 野南

川流はよ流くくまの赤柳の 車乙

初まもや何のまおし 赤の上 赤十

ね屋あふまを何ましく初付向 和丈

まを内へるは消まよま 楢口

虫の音や淋しむ林と啼り方いれ 鳥居 日豊

洋和歌

世の中いふまはなはなはなはなはな

蓋田橋南とをとり枝と雲へるものも  
よりを志の平とくさむあつしんを  
勝地の名れは流子熱向と申して

津和申あつしん又申はんむ申時 ツノ坊

月と二二の各々あれこそ ハ

後捨の縁をむじしは縁 林

んきい思ぬけ 鳥

貴出しい現ね世のけ 此

院と解き ト之

ききい 湖

唐の十 麦

積 昔

これ仲 名

はく 仙

ぬ 治

ん 之

や 月

春のあけし新なる方とくしと美人を

小塔下あけしついでおき易

神徳も厚に持はしき月あつた

ゆきもれぬ年の言やとし不思議

はるあめの月よしの後のついでし

あめの田舎乃ちおき園遊

湯川もはる流やとし流れ川

あけしついで中よゆき起る

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

鳥

夕まのふりやうふりやうのふり

た田

鳥

いつくしおきしよめのま

鳥

名録

茶のあけしついでしよめのま

林水

出てはれし何ましよめあり

麦飯

ゆきもれぬ年の言やとし不思

鳥

ゆきもれぬ年の言やとし不思

湖邑

ゆきもれぬ年の言やとし不思

鳥

お陰うー小葉あつちふふまうれ 千火  
 月ようー白く流るやと煙のそる 五律  
 雲の影下らぬくーと長月 馬郷  
 雪のふもはらぬやーとどやふ 白里  
 秋の風やうけ小葉の影はまら 海芦  
 おゆーと体も日もあれくくまを 梅五  
 今昔をさへさへはら月のをさあに 西月  
 花うーとては連法らやまを 櫻ト之

まーと花もふゆーとや小お花 かき女 玉簫  
 松のぬりよおひの坊ーぬさのき 女 きく  
 花ーとさうく花さうと葉さうれ 表道  
 千をさうらぬ流るあつちあつち 石原  
 一ゆーとあつちーと花の 子新 巴塔  
 ふふふとさうさうとさうさうさう 燈台  
 花うさうさうさうさうさうさう 以吾

